02 釜石の人と魅力、資源を掘り起こし地域の復興から発展へとつなげる

一般社団法人 三陸ひとつなぎ自然学校

「観光」と「子ども」の２つを軸に、地域づくりと釜石の魅力の発掘を行っている一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校。活動コンセプトは、「地域のために立ち上がり、挑戦する人が多いまち、釜石」。その真意やねらいを、代表理事、伊藤聡氏のこれまでの歩みから探る。

代表者	伊藤 聡氏〔代表理事〕
所在地	岩手県釜石市橋野町 34-46-1
ＴＥＬ	0193-55-4630
ＷＥＢ	http://santsuna.com

1 2 釜石鵜住居復興スタジアムで行った、ベンチの清掃ボランティア 3 子どもたちが市内の“鉄人”から釜石の魅力を受け継ぐ

ヒト

コーディネーターとして地域の復興に取り組む

一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校（以下、三陸ひとつなぎ自然学校）の代表理事、伊藤聡氏は、生まれも育ちも釜石という「釜石っ子」だ。会社勤めをしていた20代の前半から、釜石を元気にしたいという一心で市民活動にのめり込み、子どもを対象にしたイベントやワークショップなどの活動を行ってきた。また、観光を地域振興に活用することにも興味を覚え、グリーン・ツーリズムの実践にも取り組んできた。

その活動の中で、復興に当たっても精力的な活動で知られる釜石の旅館「宝来館」の女将、岩崎昭子氏と知り合い、岩崎氏の誘いもあって宝来館に転職した。東日本大震災の津波が襲ってきたのは、それから1年がたとうとしたころだった。

伊藤氏と岩崎氏は逃げ延びることができたが、「亡くなった従業員もいましたし、家族を失った従業員もいました」（伊藤氏）。宝来館は物理的にも人的にも大きな被害を受けた。それでも、地震から約2週間後の3月下旬には、伊藤氏たちは宝来館の再建に向けて動き出し、ボランティアも支援に駆けつけてきた。

やがて宝来館には、ボランティアがやってくるだけでなく、ボランティアを希望する人からの問い合わせや、支援を求める地域からの連絡など、様々な情報が集まり、ボランティアと地域や人とをつなぐ情報拠点として機能するようになった。

「元々旅館は人の出入りが多く、情報も集まりやすかったので、こうした非常時でも自然にそうなったのでしょう」と言う伊藤氏は、ボランティアに関する情報を“さばく”コーディネーターとして忙しい日々を過ごすことになった。

「当時はボランティア・コーディネーターという言葉すら知りませんでした。悩む暇もなく、人材と情報をひたすら処理していました」と、伊藤氏は振り返る。

その一方で伊藤氏は、「地域の復旧・復興にはボランティアの力が欠かせないが、資金も重要。ボランティアの活動は自己完結が原則だから、地域に資金が入ってこない。地域に資金をもたらす仕組みが必要だ」と考え、観光とボランティアを組み合わせた「ボランティア・ツーリズム」を企画する。

企画の目的は「ツアーとして被災地を訪ね、人々と交流して、復旧・復興には何が必要かといったことを理解し、さらなる支援活動につなげてもらうこと」。伊藤氏は、2011年の5月、大型連休に合わせて、ツアーを実行に移すことにした。

当時は、「復旧・復興作業の妨げになるので、不必要に被災地に行くと迷惑」という声もあったが、伊藤氏は「適正な人数が適正な場所に行くなら問題は生じない」と考え、ツアーを実施し、成功させた。伊藤氏自身は特に意識していなかったが、コーディネーターの役割をきちんと果たしていたゆえの結果だといえるだろう。

そして伊藤氏は、2011年8月に応募した、内閣府の復興支援型地域創造事業の一環である「社会起業家」を養成する事業で、初めてコーディネーターについて正しく認識することになる。

この事業は、講義とインターンシップを受け、起業の企画書を作成して合格すれば、200万円の起業準備金を受け取って起業するというもの。伊藤氏は「講義を受ける中で、ボランティアを必要とする場所と、必要とされる人を的確にマッチングさせるという、ボランティア・コーディネーターの役割と、その重要性、必要性がわかりました」と振り返る。その後、「ボランティア・ツーリズムから釜石観光振興へ」という企画書をまとめた伊藤氏は、見事、起業準備金を獲得した。

着眼点

様々な人とつながって釜石の未来をつくる

2012年4月1日、伊藤氏は、同じく起業準備金を受けた柏﨑未来氏と共に、三陸ひとつなぎ自然学校を設立する。1月に営業を再開させた宝来館での仕事が落ち着いてきたタイミングでの新たなスタートだった。

以来、三陸ひとつなぎ自然学校は、伊藤氏の「観光」、柏﨑氏の「子ども」の2つを軸にした事業を展開してきた。2014年10月に、釜石の復興の進展に合わせて三陸ひとつなぎ自然学校のビジョンを見直し、「地域のために立ち上がり、挑戦する人が多いまち、釜石」としたが、「観光をリソースにした地域起こし」「子どもの居場所づくり」という大きなテーマは変えなかった。

付加価値のあるボランティア・ツーリズムを創出

地域の問題点
自己完結が原則のボランティア活動からは地域に資金が流入しない

アイデア
観光とボランティアを組み合わせたボランティア・ツーリズムが重要

活動内容（一部）

釜石体験ツアーのコーディネート／かまとら
団体旅行、企業研修などのコーディネート。釜石市民に釜石の魅力を再発見してもらう「かまとら」に発展

放課後子ども教室
震災以降、子どもたちがのびのび遊べる場所、居場所がないという課題に対し、鵜住居、栗林2カ所の仮設団地談話室で開校

現在は、釜石の人や暮らしなどの魅力を満喫する体験プログラムの実施、大学などのボランティア・スタディー・ツアーのコーディネート、釜石でのインターンシップのコーディネート、「放課後子ども教室」の運営など、多岐にわたる事業を精力的に行っている。「20代からの市民活動で培ったつながりや信頼があるから、誤解を招かないのでしょう。活動を長く続けることが、やはり大切なのでしょうね」と伊藤氏は振り返る。

一方で、自らの活動について周囲に発信することにも熱心だ。SNSやブログの活用はもちろん、子どもを対象にしたプログラムなどでは、報告会なども小まめに行っている。「地域単位で行う保護者向けの報告会のほかに、昨年、2018年からは市内のホールで、1年間の活動の報告会も始めました」（伊藤氏）。事業を継続することは大切だが、その姿を紹介することは、信頼関係をつくる上で、さらに重要になるのだ。

伊藤氏が「様々な人とのつながり」を重視するのは、人こそが釜石最大の資源であり、人を育てることで釜石の未来がつくられると考えているからだ。

「2015年3月に『かまとら』というプログラムを始めました。『かまとら』の『かま』は釜石で、『とら』はトライやトラベルなどを指し、釜石の様々な分野の専門家である『鉄人』と一緒に、地域の自然環境、料理や伝統行事、産業などの魅力を再発見したり、考えたりする内容になっています。例えば、そば打ちがテーマになった場合、鉄人からそば打ちを学ぶだけでなく、鉄人の生き方などにも焦点を当てるといった工夫をしています。あくまで人が主役です」。

「かまとら」は釜石の人を対象にしたもので、釜石を知ってもらうことを目的にしている。これまで、地元の日本酒から釜石の自然環境を知るプログラム、ミニナイフづくりから釜石の鉄づくりの歴史を学ぶプログラム、間伐材から「木質バイオマス」や林業について考えるプログラム、さらに猟師直伝のジビエ料理講習なども実施してきた。

8つのプログラムでスタートした「かまとら」は、すぐに15に増え、2016年2月には、それまでの支援に感謝して「Meetup Kamaishi」と名称を改め、20のプログラムを実施。また、釜石の人だけでなく、他地域の人も対象とした。さらに、2018年には、日本版DMO（観光地域づくり法人）の一環として釜石市が設立した新会社「株式会社かまいしDMC」の運営に、伊藤氏たちも協力することとなった。

連携・協働

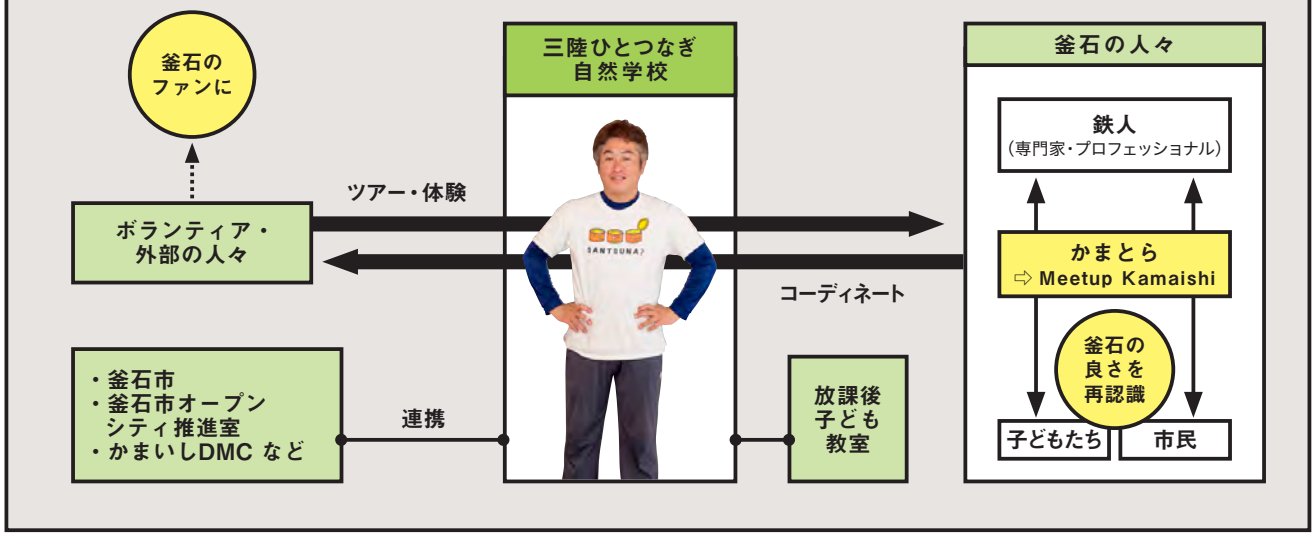
連携と交流の輪を広げて「Meetup Sanriku」を実現

人に焦点を当てた取組は他の地域でも可能だが、特に釜石で活発に行うことができるのは、「釜石が企業城下町として発展してきたからではないか」と、伊藤氏は分析している。

大きな製鉄所があり、商談や転勤などで、外から絶えず新しい人が入ってくる。「だから、外の人に抵抗感がなく、交流

1 自然豊かな釜石を体験してもらいながら、交流人口の拡大を目指す　2 子どもたちが主役の「かまとらJr.」の体験プログラム

市民同士をつなぎ、市民と外部をつなぐ「コーディネートの役割」



もスムーズなのだと思います。地域外の人と交わることで、地域も人も育つのでしょう」と伊藤氏。釜石では団体同士の交流・連携もスムーズで、一緒に事業を行うことも多い。「かまとら」も、農林水産関係の団体との連携があってこそ実現できたプログラムといえる。

釜石では行政と民間の協働も活発だ。「Meetup Kamaishi」をはじめ、様々な事業やイベントは、釜石市と協働で進めてきたもの。「『新しい東北』復興・創生顕彰」への応募も、釜石市の「オープンシティ推進室」からの推薦によるものだった。

「これからは連携と交流の輪を、釜石市以外の三陸各地へと広げていく必要がある。他地域で活動している団体と交流し、刺激し合う関係をつくるのは、私たちにとって必ずプラスに働くはずです。言葉は悪いのですが、それぞれのいいところはどんどん盗み合う関係でいいと思います」と伊藤氏。すでに宮古市の団体と連携に向けて話を進めているそうだ。

PLAYER'S INTERVIEW

代表理事　伊藤 聡

釜石生まれの釜石育ち。東日本大震災では、勤務していた旅館「宝来館」から津波に追われるように逃げた裏山で九死に一生を得る。旅館の再建と地域の復旧活動に奔走した後、三陸ひとつなぎ自然学校を設立。

目指すゴール

これからは連携と交流の輪を、釜石市以外の三陸各地へと広げていく必要があるという伊藤氏。「Meetup Kamaishi」のビジョンを三陸全体に広げて共有し、「Meetup Sanriku(三陸)」になればいいと考えている。

持続性

ラグビーワールドカップの観客を釜石ファンのリピーターにする

間もなくラグビーのワールドカップが、日本で開催されます。釜石でも、新設された「釜石鵜住居復興スタジアム」で試合が行われます。ラグビーのワールドカップは、国をあげて行うので成功することは間違いありません。私たちが取り組むべきことは、観戦に訪れる多くのラグビーファンを、釜石のファンとしてリピーターになってもらうことです。

そのためには、昨年誕生したかまいしDMCなどとも連携して、釜石全体で「Meetup Kamaishi」のプログラムになっているような釜石の人や魅力的な資源を紹介し、味わってもらうことが重要だと思います。ただ、三陸ひとつなぎ自然学校ができることには限界があるので、これまでと同様に、NPO の身の丈に合った活動、しかし、きめ細かい対応を心掛けたいと考えています。

一方で、失敗を恐れずにチャレンジすることや、走りながら考えることも忘れないようにしたいと思います。東日本大震災の後は、次から次へと出てくる問題や課題に対して、深く考える余裕もなく対処する日々でした。それでも走り続けていたから、今の自分があるのだと思っています。子どもたちにも日頃から、「失敗してもいいからチャレンジする」ことの大切さを伝えるようにしています。

※2019年6月に取材を行なっています